

第2章 近代の広島

産業奨励館



似島



2-01、2-02 広島電気（後の中国電力）本店ビルから撮影した市街風景。1936年6月13日

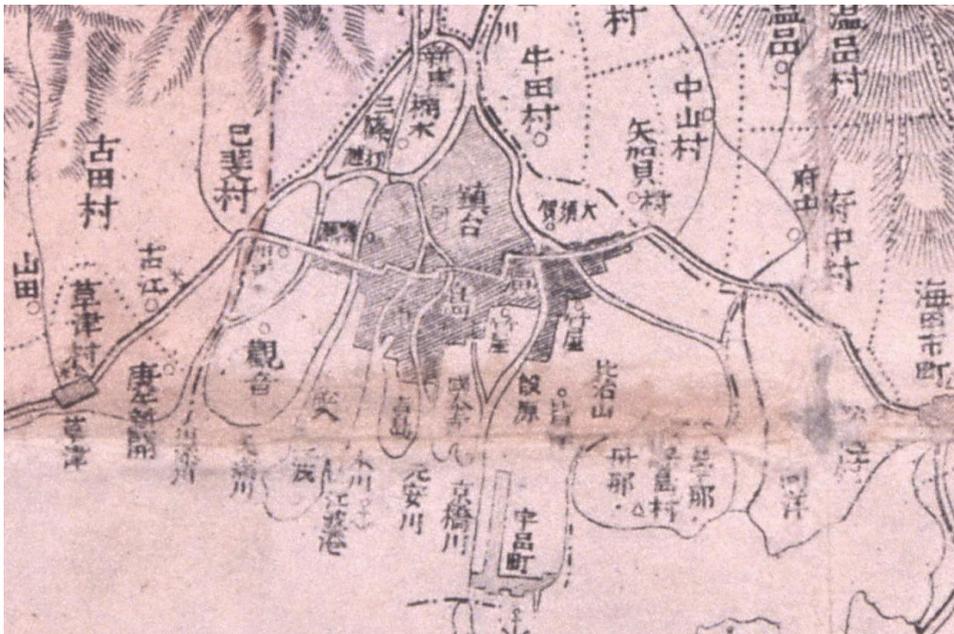
左の写真は北西方向を撮影。広島県産業奨励館のドームや現在の鯉城通りが見える。右側の写真は南方向を撮影。広島市公会堂、広島市役所、^{にのしま}似島が見える

広島市誕生

・明治維新

1853（嘉永6）年6月、アメリカの東インド艦隊司令長官ペリーが浦賀に来航して以降、幕末の動乱が始まりました。広島城下では長州戦争のために幕府・諸藩の兵士などが長期間にわたり集結し、戦争景気に潤いました。一方で、全国的に主要物価が高騰し、民衆の生活は苦しく、世直し（世ならし）を求め一揆や、豪農や米商人等の家屋や家財を壊す打ちこわしが相次ぎました。

1867（慶応3）年12月には、王政復古の号令が出され、幕府を廃絶して天皇を中心とする新政府が発足しました。1871（明治4）年7月、国外に対峙することのできる強力な統一国家とすることを目指し、政府は廃藩置県を行い、これにより、全国の藩が廃止されました。



2-05 市制町村制施行ごろの地図 1892年

広島でも浅野家広島藩は消滅し、広島県が設置されました。

県庁は最初広島城内の本丸に置かれていましたが、その後城内に鎮台（明治初期の陸軍）が置かれたことから、移転を繰り返し、1878年、水主町（加古町）に新築移転しました。



2-03 広島県庁 1935年頃

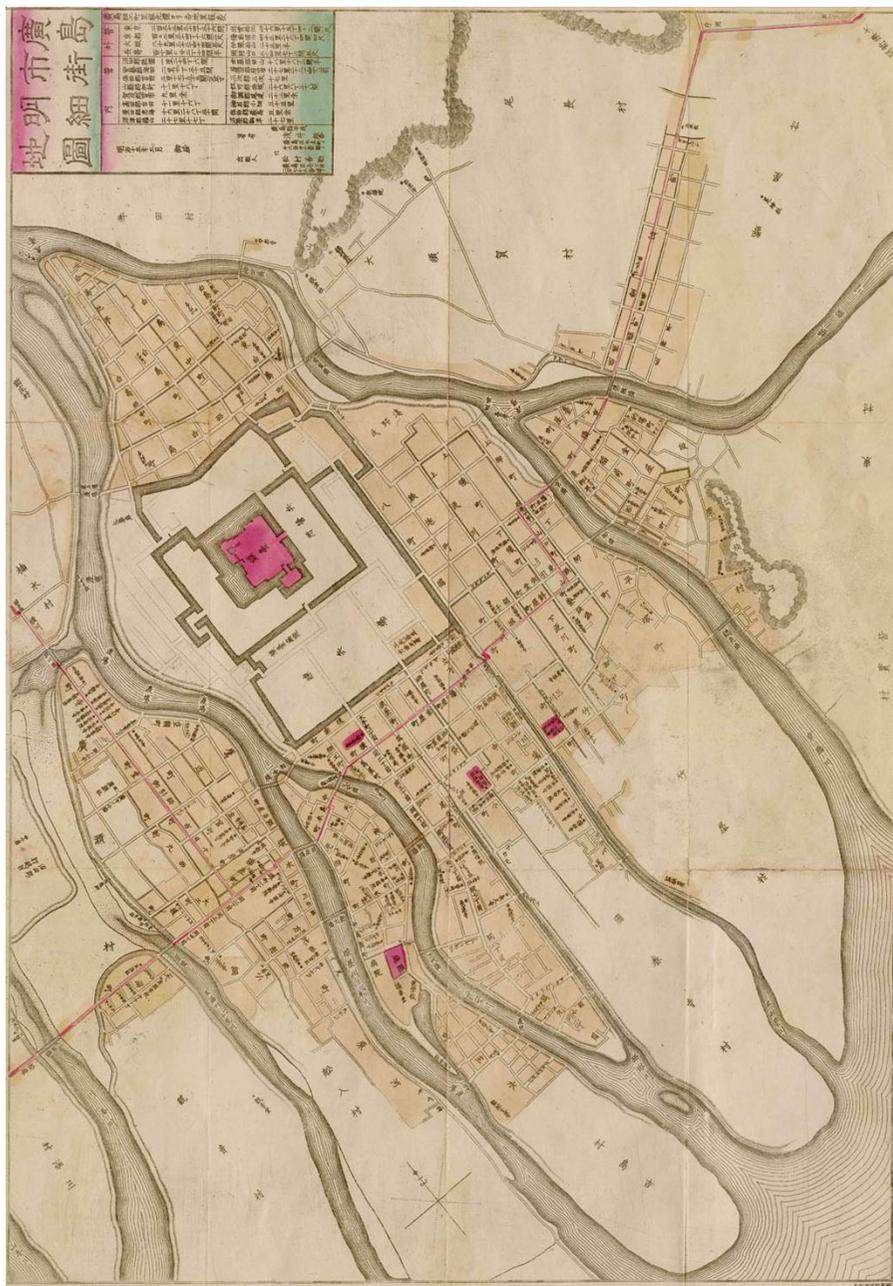
・広島市誕生

1889年（明治22年）4月1日、市制・町村制が施行され、全国で最初の市の一つとして「広島市」が誕生しました。当時の面積は約27km²、戸数は2万3,824戸、人口は8万3,387人でした。広島市役所は、当初、中島新町（中島町）にありましたが、1928（昭和3）年現在の場所（国泰寺）に、新庁舎を建設して移転しました。

広島城内には1871年、陸軍の軍団である鎮台の分営が設けられ、2年後の徴兵令発布で第五軍管広島鎮台が置かれました。1875年には、兵士の訓練を行う練兵場（後の西練兵場。現基町）が設けられ、1890年には二葉山のふもとに東練兵場が置かれ、主に広島城周辺と東練兵場周辺に軍関係の施設が広がっていきました。広島鎮台は1886年に第五師団と改称されます。広島は軍の拠点都市となりました。



2-04 最初の市庁舎



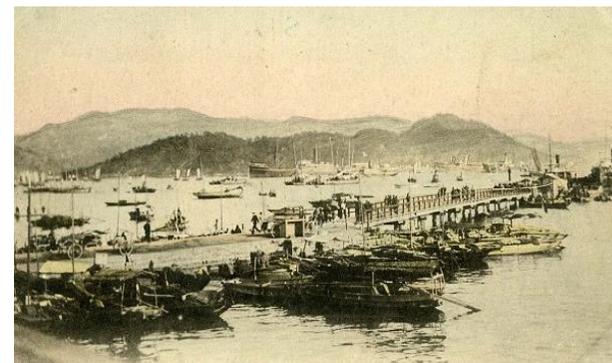
2-06 1882年発行の市街地図 広島城本丸には鎮台とある。

宇品港築港と山陽鉄道の開通

・宇品港築港

1880（明治13）年4月、広島県令（県知事）に就任した
せんださだあき
 千田貞暁は、物流活性化のため宇品に大型蒸気船が接岸できる港を築き、そこに至る道路を整備することを計画しました。

この計画には沿岸で漁業を生業とする住民を中心に反対運動が起こりました。1884年9月、住民の理解を得てようやく工事に着手し、1889年11月、5か年に及んだ宇品港の築港工事が完成しました。これにより、大量の貨物を運搬する船舶が停泊できるようになり、皆実新開（現南区）と宇品島（現南区元宇品）の間の浅海は広大な陸地となりました。



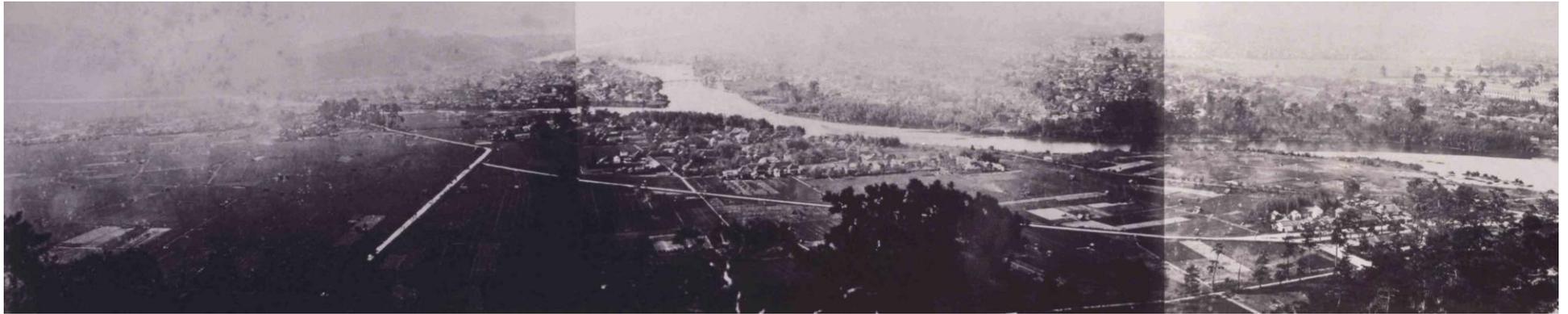
2-07 1889年に完成した宇品港

・山陽鉄道の開通

1872年、新橋－横浜間が開通した鉄道は、年を追って国内に延びていきました。1892年には、山陽鉄道が糸崎（現三原市）まで開通し、日清戦争直前の1894年6月、広島まで開通しました。山陽鉄道は1897年に徳山まで、1901年には下関まで延び、物流の要となりました。山陽鉄道株式会社は1906年国有化され国有鉄道となりました。



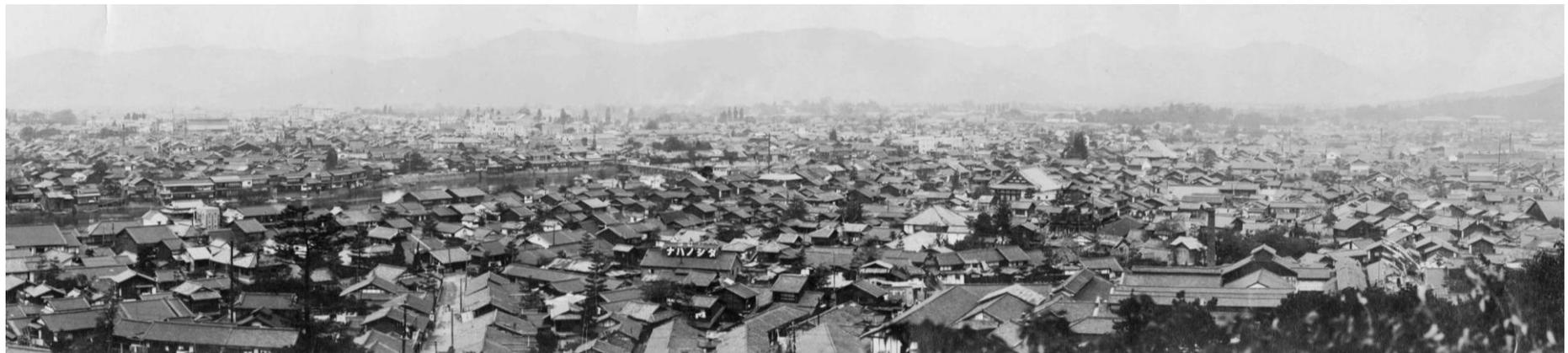
2-08 開業当時の広島停車場



2-09 二葉山からのパノラマ写真 1877年頃



2-10 二葉山からのパノラマ写真 1894年頃



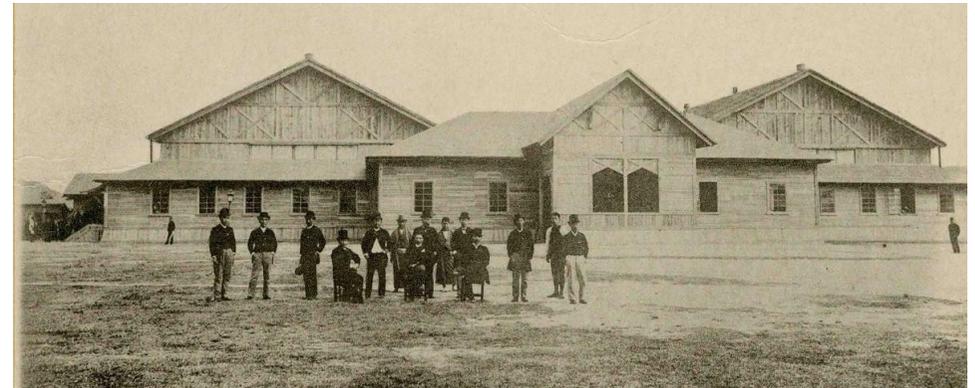
2-11 比治山からのパノラマ写真 1920年代後半

日清・日露戦争と広島

1894（明治27）年8月に日清戦争が始まると、広島駅から宇品港までの間の軍用鉄道（宇品線）が2週間余りの突貫工事により開通しました。東京から陸路では鉄道の西端に位置し、かつ大型船舶が停泊できる港を持つ広島は、戦地へ兵員や物資を送り出す兵站基地^{へいたん}となりました。同年9月には戦時の最高司令部である大本營が東京から広島城内に移され、天皇が滞在し、10月には臨時帝国議会も広島で開かれました。大本營が東京以外に設置された唯一の事例となりました。

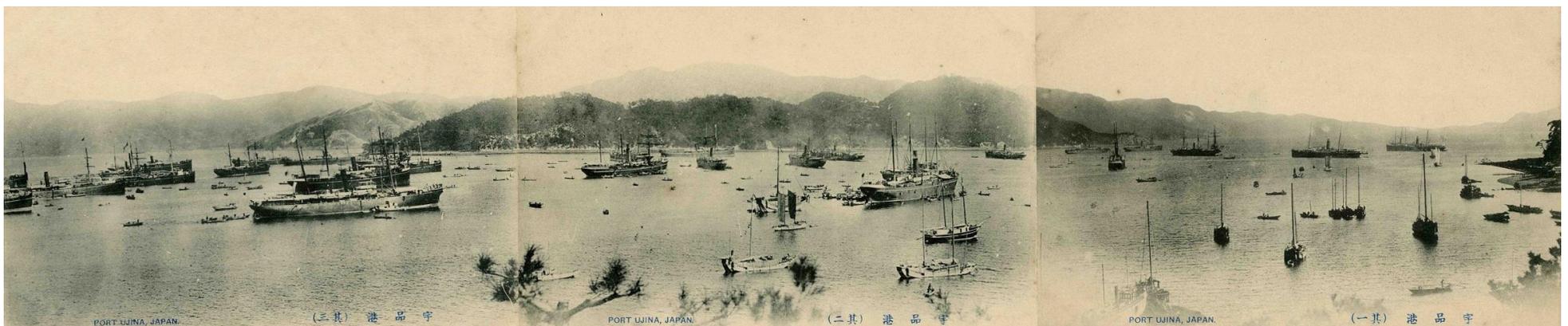


2-12 大本營 右側の建物が広島城本丸に置かれた大本營

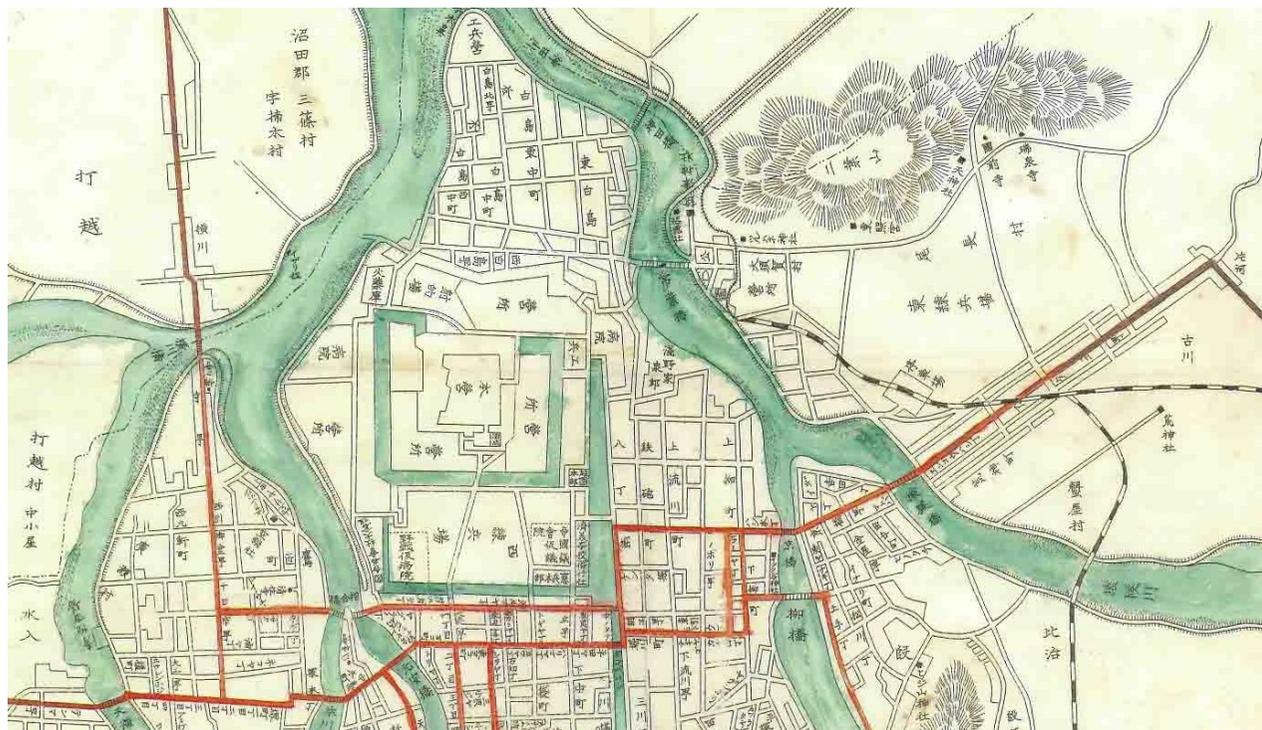


2-13 西練兵場内（現基町の市水道局庁舎付近）に建設された帝国議会仮議事堂 左が衆議院、右が貴族院 1894年

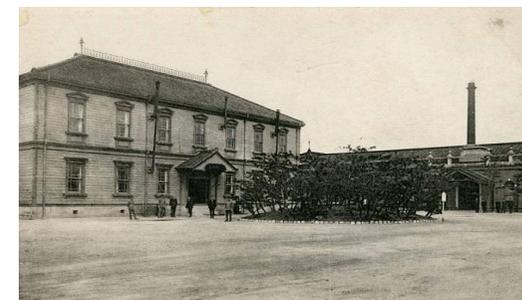
日清戦争以後、1900年の北清事変、1904・1905年の日露戦争など相次ぐ戦争により、市内には第五師団に加えて物資や人の輸送を統括する陸軍運輸部本部、兵器、被服、食糧等の補給関係の軍事施設などが次々と設置され、広島市は、「軍都」としての性格を強めていきました。このことは、広島の産業・経済の発展と密接に関わることになりました。



2-14 宇品港に停泊する輸送船 1894年



2-15 1894年の広島城周辺 (日清戦争開戦後に発行された市街地図「広島市街詳細地図」より)



2-17 宇品陸軍糧秣支廠 1926年頃



2-16 日本の兵員輸送の最大拠点となった宇品港 1902年

中央、軍用棧橋奥の建物は1902年に本廠を宇品に移管した台湾陸軍補給廠（1904年に陸軍運輸部に名称変更）。護岸は瀬戸内海の大きな干満差に対応した「すべり」という斜路に似た構造で、人や馬、荷物を舁に乗せて沖合の軍用船に運んだ

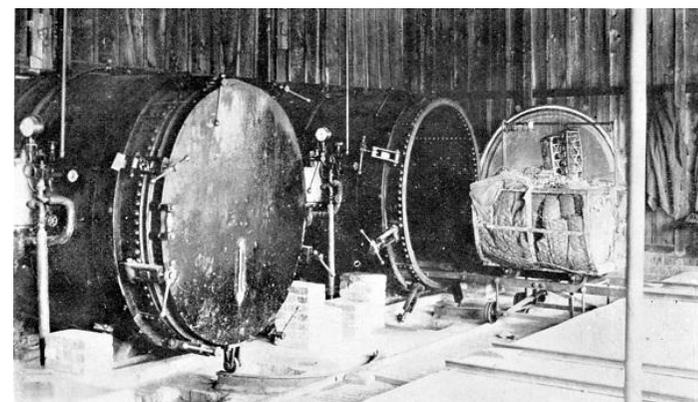


2-18 建設中の陸軍被服廠広島派出所 1905年



2-19 建設中の陸軍兵器支廠兵器庫 1913年頃

日清戦争では、戦地からの帰還者を介して持ち込まれたコレラが市街地を中心に流行しました。軍内でも伝染病の感染者が増加したため、軍は、1895年広島湾内の島「似島」に臨時陸軍検疫所を開設し、帰還した兵士の検疫や隔離、衣服や持ち物の消毒などを行いました。



2-20 似島検疫所の蒸気消毒装置 1920年頃

似島の臨時陸軍検疫所には、第一次世界大戦時の1917~1920(大正6~9)年の3年間、俘虜収容所が開設され、中国山東省青島を^{さんとうしょうチンタオ}守備していたドイツ兵らが俘虜として収容されました。この間、サッカーの試合や音楽会、俘虜技術工芸展覧会等を通じて市民との交流が行われ、広島^{広島}のスポーツ、音楽活動等の発展にも影響を与えました。



2-21 ドイツ兵俘虜とのサッカー交歓試合の記念写真 1919年1月

近代都市への変貌

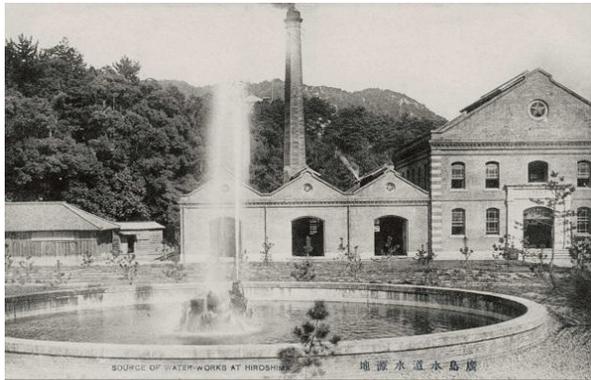
●都市基盤の整備

・上水道・下水道の敷設

軍事施設が設置されたことなどにより、上水道の敷設など都市基盤の整備も進みました。

川の水を飲用水として使用していた広島では、かねてから飲用水による伝染病感染が頻繁に発生しており、上水道敷設の機運が高まっていました。軍も広島を軍事拠点として十分に活用するには上水道

が不可欠であると認識し、日清戦争終結間もない1895(明治28)年11月、軍用水道の敷設を決定しました。市の上水道は、1898年8月に完成した軍用水道に接続して市民に給水する形で計画され、1899年1月、給水を開始しました。



2-22 牛田村(現東区)に建設された浄水場 1898年頃

下水道は1906年、5か年事業として敷設することが計画され、1908年3月に着工しました。途中財政事情等から再三遅延しましたが、1916(大正5)年5月、工事が完了しました。

・広島城の濠や運河の埋め立てと街路の整備

城濠や運河の埋め立ては、その一部に街路が作られ、電車軌道が敷設されるなど街の景観を大きく変貌させました。

1912年11月、広島電気軌道株式会社経営の市内電車(路面電車)の軌道が、外堀や運河を埋め立てた街路に敷設され、広島駅-紙屋町-相生橋線など3路線で開通し、従来の乗合馬車に代わり市内の主要交通機関となりました。



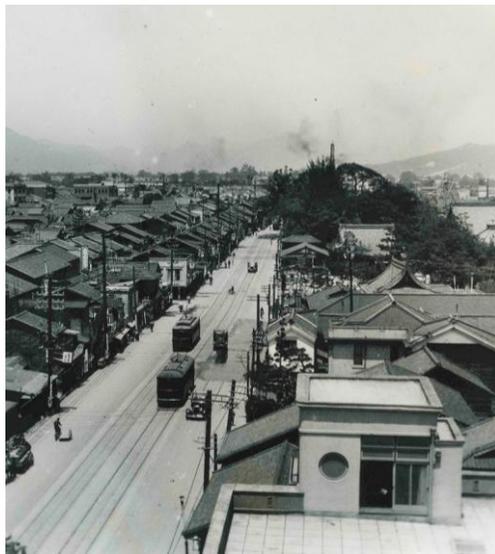
2-23 城濠・運河の埋め立てと電車軌道の敷設



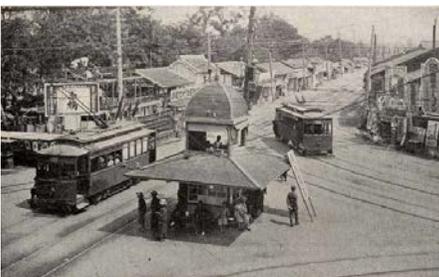
2-24 紙屋町付近を走る開業当時の路面電車 1912年 電車の後ろに外堀の石垣が見える。



2-25 西塔川と広島女子高等小学校
(現在の広島市役所付近) 明治中期



2-27 西塔川を埋め立てて敷設された紙屋町-宇品線の
電車軌道。広島電気本店(後の中国電力本店)ビルから北望 1935年5月



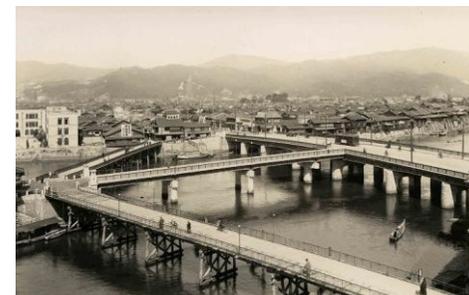
2-26 紙屋町交差点 ポイント操作員の詰所
兼待合所



2-28 明治初期の相生橋。慈仙寺鼻には通行料を徴収する小屋がある



2-29 1878年に架けられた相生橋。左後方に5階
建て料理店「五階楼」が見える。橋を渡る料金を
書いた看板が右下に立てられている



2-30 丁字橋が完成しH型になった相生橋
1935年頃



2-31 相生橋電車併用橋 1939年



2-32 京橋 1932年頃

1923年、住みやすい近代的な都市をつくることを目的とする都市計画法が広島市にも適用され、都市計画街路、公園や緑地等が計画に盛り込まれました。計画された街路や公園等の一部は実現しましたが、戦時体制に突入して事業は停滞しました。戦況が厳しくなると幅員の広い道路の予定地にある建物が解体され、防火帯となりました。

江戸時代は政治上、軍事上の理由から城下を東西に貫く西国街道筋以外に橋を架けることが制限されており、川を渡るには渡し舟が用いられました。明治に入り制限はなくなりましたが、公共事業として橋を架けるのは難しく、渡船料や渡橋料金が必要な渡し舟や木橋も利用されました。木橋は水害でたびたび流され、大正時代後半には市内の各河川に架かる主要な橋は、木造から鋼鉄やコンクリート製の永久橋への架け替えが進みました。

●交通機関の発達

・鉄道の開通

1894（明治27）年の山陽鉄道の広島延伸、1903年の呉－海田市間の官設鉄道呉線開通に続き、1909年には大日本軌道広島支社の軽便鉄道として可部線が横川－祇園間の営業を開始し、1911年6月には可部駅まで延びました。また、県北部に延びる芸備線は1915（大正4）年4月芸備鉄道として志和地間までの運行を開始し、1923年12月庄原まで開通しました。こうして鉄道により広島市と北部の町村、さらに備北地方が結ばれ、物資と人の流れが大きく変化しました。



2-33 可部軽便鉄道八木梅林停車場

・電気軌道の敷設

1912年に開通した市内電車は、1915年4月には御幸橋－宇品線、1917年11月に左官町（現十日市町）－横川線が開通すると、市内の交通は一段と便利になりました。

また、1920年に市郊外の電気軌道の建設が始まり、1931（昭和6）年には宮島口まで開通しました。この宮島線の開通により、沿線各地では住宅地開発が進み、1936年には楽々園遊園地も誕生しました。



2-34 楽々園遊園地 1936年8月

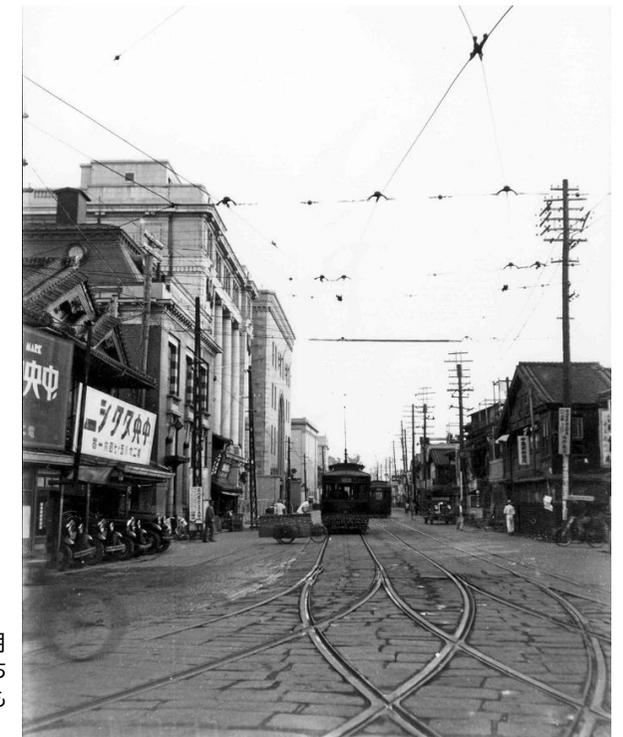
・自動車の発達

明治維新後、通行が自由になり、さらに産業が発達すると、人力車や馬車、牛車等による近距離の移動が盛んになりました。また明治末期ごろから自動車の利用も活発になっていきました。

1928年には、広島乗合自動車株式会社が市内のバス営業を開始、1929年には、タクシー業者による自動車協会が設立されるなど、自動車による運搬が盛んになっていきました。



2-35 1903年、可部－横川間を走ったといわれる乗合自動車



2-36 紙屋町交差点 1935年9月
芸備銀行等金融機関が立ち並びタクシー会社の看板も見える

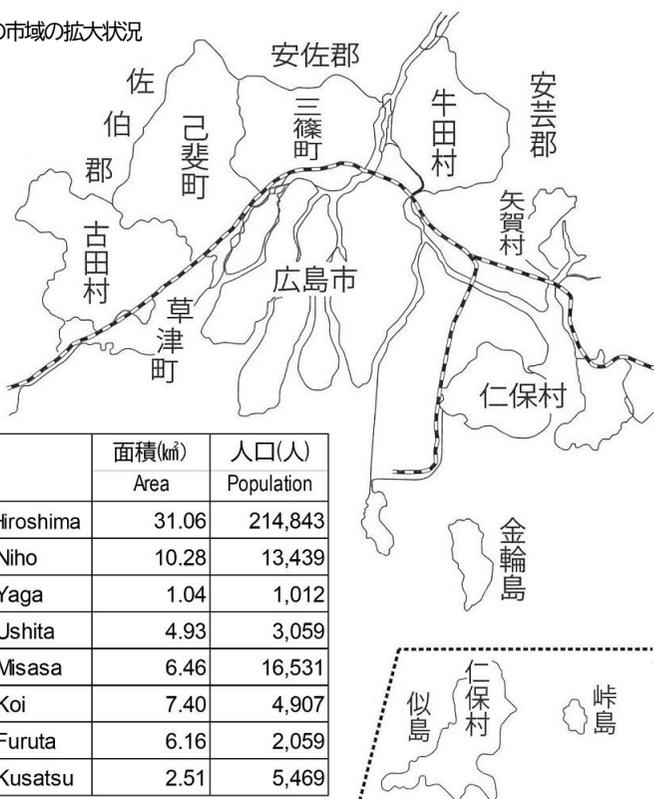
●市域の拡大

広島市は、1904（明治37）年9月に仁保島村字宇品島を市域に編入（新町名：元宇品町）、さらに1925（大正14）年、広島市と隣接する7か町村（仁保村・矢賀村・牛田村・三篠町・己斐町・古田村・草津町）を含む6,988万424㎡が都市計画区域として決定されたことなどから、これら町村に合併を働きかけ、1929（昭和4）年4月、合併が実現しました。これにより、人口は27万人を超え、全国で7番目に人口の多い市となりました。



2-37 合併前の三篠町の家並 1930年頃

2-38 明治以降の市域の拡大状況



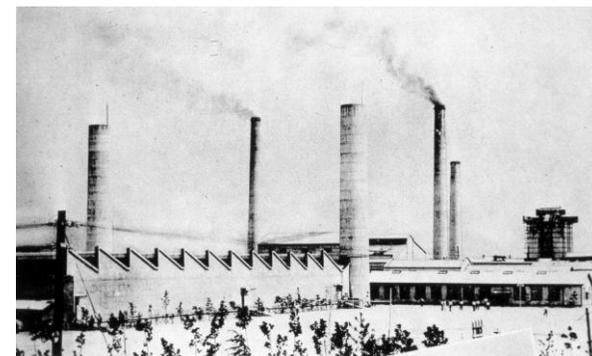
産業と経済

●産業の発展

・工業

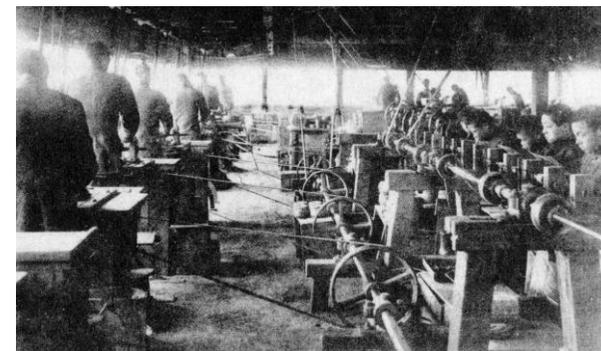
広島地域には、明治以前から山繭織、^{やままゆ}かもじづくりや木履の製造、^{ぼくり}木綿紡績、鋳物業等の伝統的な産業がありました。これらの伝統産業を軸にしながら、関連する製造業が集約する形で、新しい産業が発展しました。

江戸時代に「安芸木綿」として知られるほど伝統的な綿業地帯であった広島には、1882（明治15）年、全国2か所目の官営綿糸紡績所が完成しました。水源不足等から何度も移転し徐々に衰退していきましたが、そこから派生した民間紡績業は、後の帝国人造絹糸（帝人）の誘致などにつながりました。



2-39 1933年に宇品町に設立されたレーヨンを製造する錦華人絹株式会社広島工場

現在も特産品である縫い針は、江戸時代初期から家内工業的に製造されており、1924（大正13）年には全国生産の90%を占める生産地でした。



2-40 三篠町の中田製針工場 1910年代前半

広島県は明治前期から昭和戦後期まで国内有数の缶詰生産県でした。特に戦時には戦地での食糧として需要が高まり、糧秣支廠や市内各地の工場等で製造されました。肉、特産の牡蠣、魚、みかんなども缶詰に加工されました。特にみかんの缶詰はその多くが海外に輸出されました。



2-41 広島畜産株式会社の缶詰工場 1920年代前半頃

近代的な重工業でも新たな工場が設立、誘致されました。東洋コルク工業株式会社としてスタートした広島東洋工業株式会社（現マツダ）は、1931（昭和6）年に三輪トラックの生産を開始しました。三輪トラックは「オート三輪」とも「バタンコ」とも呼ばれ、戦中から戦後復興期にかけて四輪車が普及するまでの物流の一端を担いました。



2-42 三輪トラック製造風景

1920年に発足した日本製鋼所広島製作所では、主に海軍兵器を製作しました。また、1943年に江波・観音地区の埋立地に起工した三菱重工業の造船・機械部門の工場では、戦時の大量物流を目的とする構造の簡易な船舶（戦時標準船）とその部品を製造しました。これらの工場の稼働は、広島の実業の発展に大きく寄与しました。

・農林・水産業

市制施行前年の1888年時点で広島県の耕地は、市域の4%（1,082㎡）でした。塩分を含む土であったため稲作には適さず、当時の農産物価格で第1位となったのは綿でした。第2位が裸麦、米は第3位、藍が第4位で、この主要4品が農作物の中心でした。

1914年の耕作面積では麦が1位、野菜の平茎（広島菜）、ネギ、大根が2位から4位、米が5位、綿が6位となり、綿が大きく後退し、野菜作りが中心となりました。人口の増加に伴い近郊の町村でも野菜作りが盛んになり、市内に出荷されました。

水産業では、有名な牡蠣と海苔の養殖が海岸沿いの遠浅の海で行われました。牡蠣や海苔は船で遠方に運ばれ販売されました。



2-43 広島菜の取り入れ



2-44 カキ養殖 1941年頃



2-45 海苔の乾燥 1955年2月

・商業

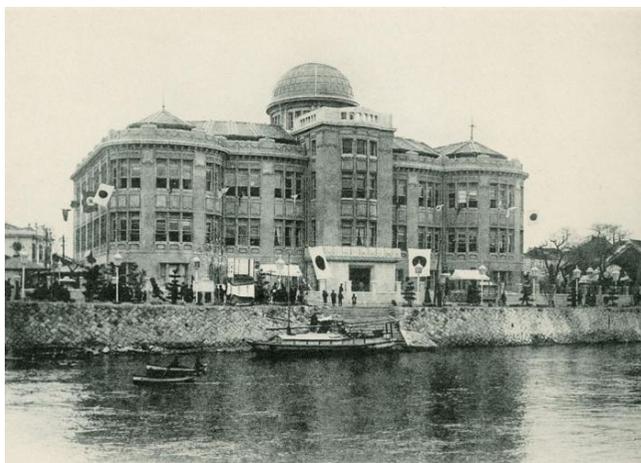
江戸時代、城下の町人町を中心に発展した商店は、明治に入り徐々に自由に営まれるようになりました。当初は西国街道沿い、特に中島地区を中心として発展しました。堀や運河を埋め立ててできた街路沿いには、銀行等の近代的な金融機関や百貨店が出現しました。市内電車が開通し新天地が開場すると、繁華街は東に延び、紙屋町、八丁堀、胡町などに賑わいが移っていきました。

また、農産物や魚介類などの産品を集めて売る卸市場も徐々に整備され、江戸時代から続く中の棚市場に加え、大手町七丁目（現三丁目）に水産市場、大手町八丁目（現四丁目）に青物市場などが開設されました。

●広島県物産陳列館と産業振興

明治時代後期の広島では、伝統産業のほかに軍需に結び付いた近代工業が発達し、特に1904・1905（明治37・38）年に起きた日露戦争を契機にして、人口の急速な増加、大量の軍需品の地元調達が行われたことなどによって、広島市内外は盛況を極め、経済は活況を呈しました。このような経済的な発展に伴い、それまであまり進んでいなかった近代工業の国内での激しい市場競争に耐える製品の開発、品質向上、販路拡大等を図るための拠点施設づくりが求められるようになりました。

1915（大正4）年4月5日、県内の産業奨励のための施設「広島県物産陳列館」が完成しました。その後、広島県立商品陳列所、広島県産業奨励館と名称を変えましたが、県内の物産、他府県の参考品の収集・陳列、商工業に関する調査及び相談、取引の紹介に関する図書・新聞・雑誌の閲覧、図案調整等を



2-46 広島県物産共進会第一会場となった広島県物産陳列館 1915年

業務として行っていました。また、博覧会や美術展の会場としても使用され、文化発展・振興の役割も果たしていました。



2-48 広島県商品見本市の会場 1936年8月

2-47 1936年8月、広島県産業奨励館で開催された広島県商品見本市の会場入口

●海外移住

広島県は戦前、全国最多の移民を送り出しました。1885（明治18）年の第1回ハワイ官約移民945人のうち広島県は222人を数えたのをはじめ、米国本土やカナダ、南米ペルー、ブラジルへと広島市や近隣の佐伯郡、安芸郡、沼田郡、高宮郡などから多くの人々が渡りました。外務省「旅券かふすう下附数及移民統計」などによる1899（明治32）～1941（昭和16）年の都道府県別移民数は、約9万6千人と全体の約15%に上りました。日本人移民は契約労働から苦闘を重ね、農業経営や商店経営などに進出し、子どもたちと日系社会を築いていきました。



2-49 カリフォルニア州で果樹園を営む広島ゆかりの日系家族 1928年

市街地の変化

市内電車の開通により街の景観は一変しました。城下町の南北の中心筋は、大手町通りから東の電車通り（現鯉城通り）に移動し、築城以来栄えていた中島本町を中心とする繁華街が、東の八丁堀や新天地に移動する要因にもなりました。

・中島地区

元安川と本川に囲まれ西国街道が通る中島地区は、陸路と水路が交わる交通の要所として江戸時代城下最大の繁華街でした。明治以降も街道や川沿いには、特産品や嗜好品、舶来品、問屋や料理店、旅館、映画館等さまざまな店が立ち並び、商店街は本川西岸の堺町、塚本町まで続いていました。



2-50 明治初期、中島本町にあった広島特産の針を扱う商店



2-51 元安橋東詰。橋の向こうが中島本町 1926年



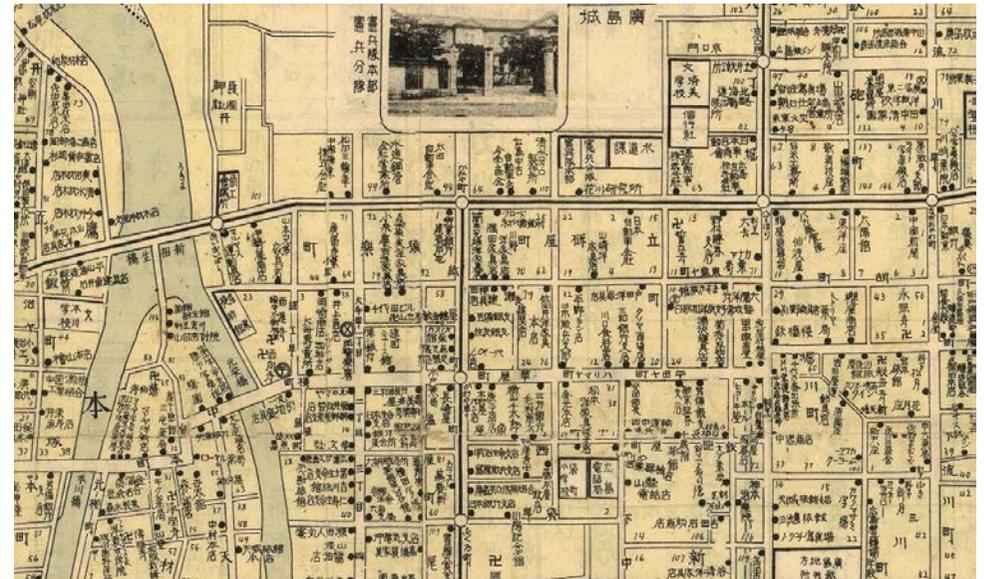
2-52 本川橋 対岸は塚本町の様子 大正頃



2-53 中島本町にあった映画館昭和シネマ 1935年頃



2-55 広島本通り 中島本町方面を望む 大正期 右端のモダンな建物は広島郵便局。鉄製欄干の元安橋が見える



2-54 1939年頃の広島市街地図

・本通り（革屋町通り）

元安川を挟んで中島地区の対岸にある本通りも城下町時代から西国街道の一部として栄えた地区でした。明治以降も商店が立ち並ぶ街でしたが、八丁堀や新天地が繁華街として成長するにつれて、二つの繁華街をつなぐ本通りも、繁華街としてさらに成長していきました。1925（大正14）年には電気の鈴蘭灯が据え付けられ、コンクリート造りの金融機関や小規模な洋風建築も建設されました。



2-56 本通り鈴蘭灯 1935年頃

・大手町筋

現在のエディオン本店や県民文化センターの間を通る筋は、築城時から南北筋の中心として栄え、明治以降も銀行等の金融機関が立ち並んでいました。西塔川を埋め立てて電車通り（現鯉城通り）ができるまで、この通りが南北のメイン通りでした。



2-57 明治末期頃の大手町筋を北に向かって撮影したもの。左端の建物は1906年竣工の広島県農工銀行、右の望楼は日本火災広島支店

・紙屋町

紙屋町には、広島城の外堀と西塔川を埋め立てて交差する道路（現相生通りと鯉城通り）が作られ、さらに広島駅前－紙屋町－御幸橋線と紙屋町－己斐線の電車軌道が敷設され、交通の要所となりました。御幸橋に向かう電車通り（現鯉城通り）には、金融機関のビルが立ち並ぶようになりました。



2-58 紙屋町交差点 1930年頃

・八丁堀

市内電車開通の翌年の1913年、現在の福屋本店の位置に、市内で2番目の活動写真常設館として「帝国館」が開館しました。その後続いて活動写真館や見世物小屋などもでき、八丁堀は新しい盛り場となりました。1929（昭和4）年10月には、広島初のデパートとして通りの北側に福屋百貨店が開店。1938年には、8階建ての新館（現在の福屋本店）が開館しました。



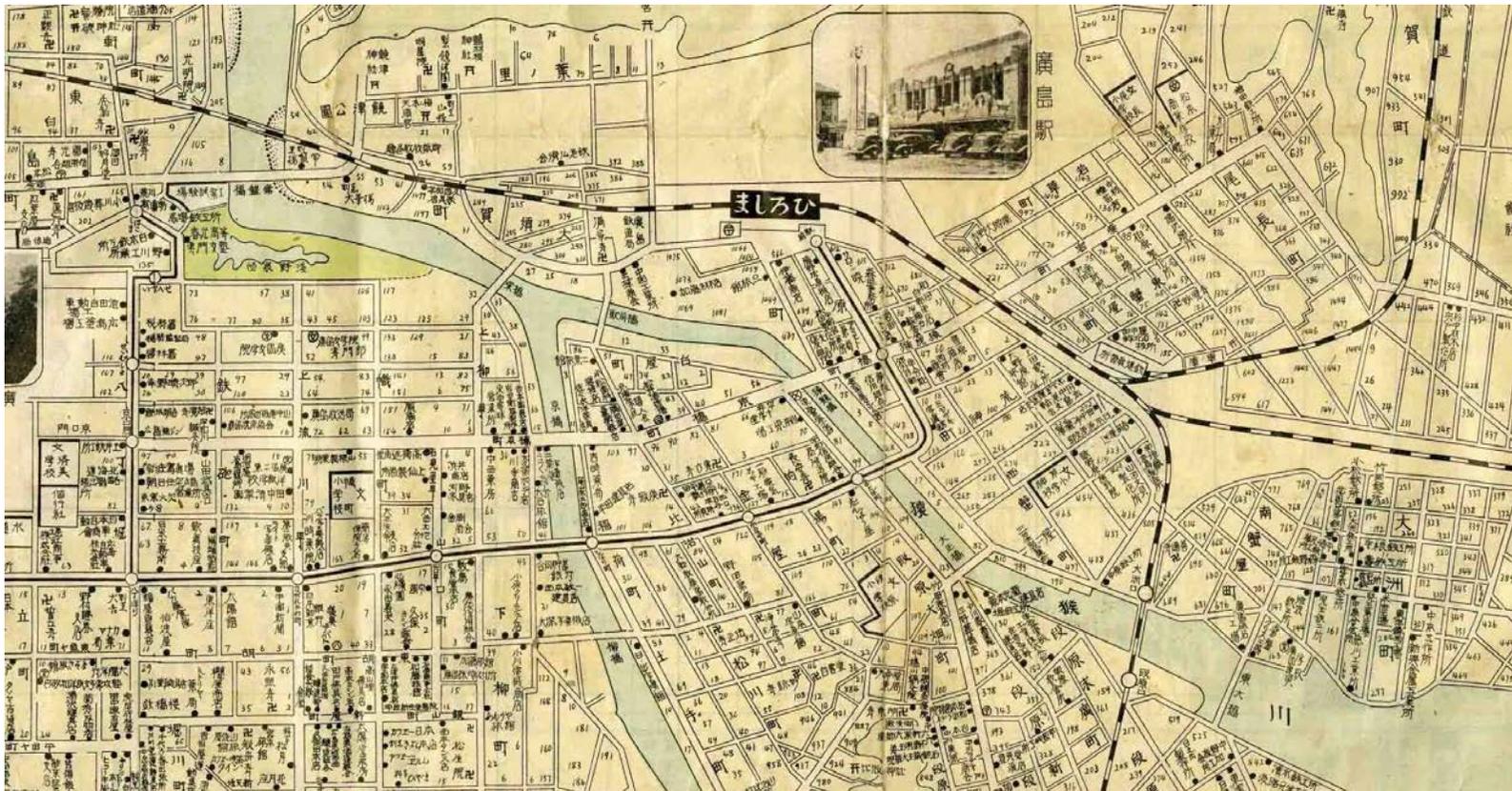
2-59 八丁堀の福屋百貨店 右側の建物が新館（現在の本館）、電車通りを挟んだ左側の低い建物が1929年に開店した本館 1940年頃

・新天地

1921年には堀川町に娯楽場の新天地が創設され、活動写真館等を中心に劇場・芝居小屋、飲食店等各種の店が集まる新たな繁華街が誕生しました。1927年には東に進展して東新天地となり東西2か所になりました。



2-60 新天地 1920年代後半



2-61 1939年頃の広島市街

・広島駅周辺

広島駅は1894(明治27)年6月、山陽鉄道の停車場として、市街中心部を避けて大須賀村に設けられました。このため駅周辺と繁華街が離れて発展することになりました。

山陽鉄道に加え、軍用鉄道宇品線、芸備鉄道、八丁堀方面の路面電車の発着駅となった広島駅の周辺には、旅館、飲食店、金融機関、問屋、商店などが集まり、まさに広島陸の玄関口となりました。商店は電車通りと西国街道に沿って八丁堀方面まで続いていました。



2-62 1922年に竣工した鉄筋コンクリート造の駅舎。左隣は郵便局の建物

暮らしと文化

●「学都」広島

明治新政府は、近代国家建設の基として文明開化と富国強兵を進めており、それを支える人材養成と国民一般の知識水準を高めることを重視しました。1872（明治5）年、学制が公布され、初等教育機関として小学校の設置が進められ、1875年には現市域の全体に小学校が設置されました。

中等教育機関としては、1874年に官立の外国語学校（後の広島英語学校）と小学校教員を養成する師範学校が設置され、1877年、広島県英語学校は広島県中学校（後の県立広島第一中学校）となりました。女子中等教育では、1887年には広島英和女学校（後の広島女学院）、私立広島高等女学校（後の山中高等女学校）が設立されました。

中等教育は、明治20年代にはまだ一般民衆には縁遠いものでしたが、次第に進学希望者が増加し、明治30年代以降市内の中学校・高等女学校・実業学校などの中等学校の設置が進みました。

中等学校等の急増により教師不足が生じるなか、専門性を持つ教師を養成する高等師範学校の設置が求められました。広島県と広島市は東京に続く高等師範学校の誘致に乗り出し、1902年、広島初の高等教育機関として広島高等師範学校（広島高師）が開校しました。

続いて1920（大正9）年に広島高等工業学校、1923年に広島高等学校、1928（昭和3）年には広島女子専門学校等が設置され、広島は多数の高等教育機関を擁する都市となりました。



2-63 広島高等師範学校 1926年頃

広島高師の開学により、市内には付属の小学校・中学校も開校し、初等・中等教育の向上にも大きな影響を与えました。また、同校の教師や学生による音楽活動、各種スポーツ競技の実践や、図書室の市民開放などの取り組みは、市民文化・スポーツの発展にもつながりました。

1929年には、広島高師を母体に広島文理科大学（文理大）が設置され、両校は東京文理科大学・高等師範学校と並び日本の教育界の二大拠点となりました。広島は「学都」とも呼ばれるようになり、中国・四

国地方の教育や文化の中心都市として発展しました。広島高師には1920年代になると朝鮮・中国・台湾からの留学生が毎年、十人前後は入学しました。文理大へも開学時から留学生が入学し、1930年代には日本の関東軍が支配した「満州国」から、第二次大戦末期には東南アジアからの留学生も学んでいました。

広島高等学校（広高）は姫路高等学校とともに最後の官立高等学校として、1923年、開校しました。広島は、それまで岡山の第六高等学校など近隣の高等学校から帝国大学に進学していました。広高の開校により、帝国大学への進学者が地元からも増えていきました。



2-64 広島高等工業学校 1926年頃



2-65 広島文理科大学 1935年頃



2-66 広島高等学校 1926年頃

●文化・スポーツ

広島は、江戸時代長く広島を治めた浅野家の影響もあって、幕末には文化・芸術を受容する力のある都市として成長していました。日清戦争が始まり大本営が置かれると、東京などから多くの人が入り、各国の特派員等の外国人も多く訪れました。宇品港が外地に兵員や物資を送り出す港となったことで広島は兵站基地となり、その後も人が集まる賑わいのある都市となり、軍都としての性格を持ちながら、文化的なものも尊重する独特の文化風土をはぐくみました。

・芸術

音楽では、1906（明治39）年、広島高等師範学校の教員や学生による音楽団体「^{ていみ}丁未音楽会」が結成されました。教員や学生らによる定期的な演奏会は、市民に広く洋楽を紹介するきっかけとなりました。その後東京から東京音楽学校の教員などを招いた演奏会も開催され、間近で一流の奏者による洋楽演奏に触れる機会を市民に提供することになりました。



2-67 広島高等師範学校の丁未音楽会 1920年

美術では、1898年、東京美術学校や海外の美術学校で最先端の美術教育を受けた作家たちが広島で美術教育に携わり、広島美術の水準を一気に引き上げました。その活動は学校にとどまらず、美術団体の立ち上げや、展覧会の開催などに渡り、広島美術に新たな展開をもたらしました。1915（大正4）年に広島県物産陳列館が開館すると、ここを会場に県美展などの展覧会が開催されました。

・スポーツ

近代スポーツは、明治期に学校教育の一貫として行われた「運動会」に始まり、その後中等学校や高等教育機関における課外活動を基盤に、普及・発展していきました。

広島の代表的なスポーツである野球は、1886年、広島師範学校（県師範。初等教育の教員を養成）で始められ、競技種目としての本格的な陸上競技は、1909年に県師範に着任した体育教師により紹介されました。水泳は1893年に、またサッカーも始められ、多種類の競技でしばしば全国優勝をすることから、広島は「スポーツ大国」と呼ばれるようになりました。

・文化施設

広島の文化施設としては、1908年に広島市公会堂（国泰寺町・現中区役所付近）が誕生しました。広島市公会堂は、料亭を改造した建物であったため、集会等にはよく使用されましたが、演劇は寿座（小網町）・新天座（新天地）等で、洋楽は高等師範学校等の学校の講堂が主に利用されました。



2-68 全国中等学校優勝野球大会（夏の甲子園）で3度目の優勝を果たした県立広島商業学校野球チームの歓迎光景 1930年



2-69 全国菓子飴大品評会の審査会場となった広島市公会堂

1915年、ヤン・レツル設計により完成した広島県物産陳列館は、県内物産の展示販売、事業者支援などの産業奨励業務に加えて、絵画の展覧会や博覧会等のイベント会場として使用され、文化の普及・育成・伝承の面でも重要な役割を果たしました。



2-70 広島県物産共進会第一会場となった広島県物産陳列館の陳列室 1915年

1913年、泉邸（縮景園）内に、浅野家が所蔵する美術品を展示する観古館が開館し、一般に公開されました。観古館は1940（昭和15）年、縮景園と一緒に広島県に寄付されましたが、被爆により全焼しました。現在ほぼ同じ場所に広島県立美術館が開館しています。



2-71 観古館 大正期

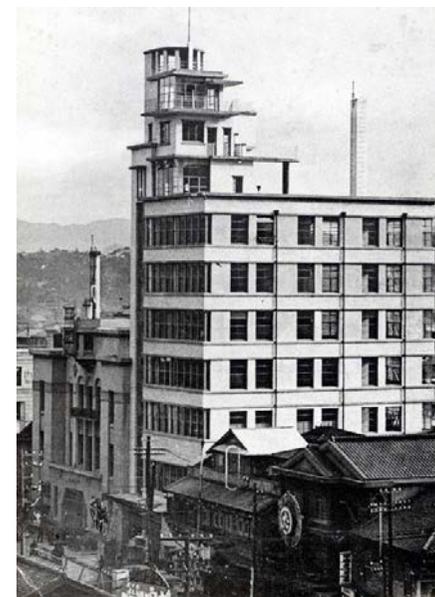
1926年、浅野家が所蔵する主に郷土に関する図書や記録を収蔵する「浅野図書館」が小町に開館しました。同館は1931年、広島市に寄贈されました。原爆により建物の外郭を残して焼失。疎開して焼失を免れた貴重資料の一部は、現在の広島市立中央図書館に受け継がれています。



2-72 浅野図書館 1926年

・新聞社・放送局

明治中期、広島を代表する新聞は「芸備日日新聞」でしたが、明治末頃から「中国新聞」が部数を伸ばし、大正期にはついに逆転することとなりました。昭和期になると芸備日日新聞社の経営は悪化し、中国新聞社に吸収されました。その他市内には「大阪朝日新聞」、「大阪毎日新聞」や「同盟通信」の支局も置かれていました。



2-73 1936年に上流川町（現胡町）に完成した中国新聞社新館（手前）。左側が本館



2-74 1928年、上流川町（現職町）に完成した広島放送局

ラジオ放送開始の3年後、1928年7月、日本放送協会広島放送局が開局し、広島でもラジオ放送が始まりました。広島放送局が独自に制作した番組では、地元音楽家の演奏や呉海兵団軍楽隊、丁未音楽会管弦楽団、^{はだ}羽田歌劇団等の演奏が放送されました。